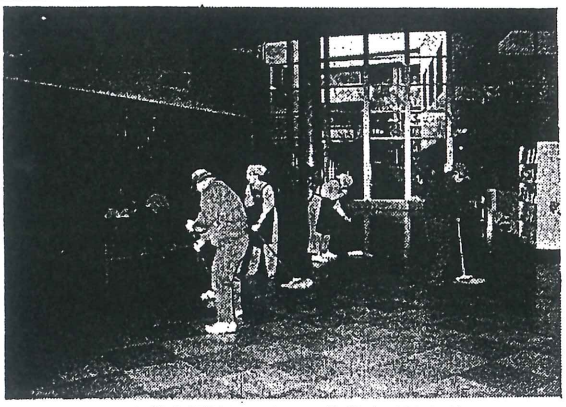

市総合福祉センターで作業する障害者

障害者の自立助ける
㈱ハンディキャップ・サービス

「ワーッ社長さんが来た、来た」、「社長さん、社長さん」と喚声をあげて高津氏の周囲に集まってきたのは、立川市総合福祉センターで働く二十歳代の障害者たち。

同センターを訪れた高津氏を、まるで慈父か実の兄のように慕ってきた障害者たちは、このセンターで働くようになって、間もなく満三年になる。

そしてこの障害者たちが、「一人前」に社会に出て働けるように道をひらいたのが、高津年夫・㈱ハンディキャップ・サービス専務取締役その人といえば、障害者たちに慕われているのも当然とうなずけよう。

㈱ハンディキャップ・サービス（万田貴久・代表取締役＝立川市曙町二―八―三〇）は、心身障害者の自立を助けるために設立された会社で、平成五年九月に役員として岩崎泉・立川商工会議所会頭、中野隆吉・立川栄郵便局長を顧問に、万田貴久・立川商工会議副会頭、高津年夫・㈱アイサービス代表取締役がそれぞれ資本金を出資して設立された。

営業種目は、一般清掃業務、機械設備保守管理業務、環境衛生管理業務、貯水槽等清掃業務、害虫駆除業務、警備業務、受付業務、駐車場管理業務、一般産業廃棄物処理業務、文書作成業務となっており、障害者の働く場を、さらに広げたいとしている。

しかし、現状は長びく不況の影響で、一般企業でもリストラの荒波にもまれ健常者ですら失業する状況だけに、㈱ハンディキャップ・サービスが狙う障害者の社会進出はままならないようで、立川市に委託された総合福祉センターの清掃業務だけが、目下唯一の仕事になっている。

同社の母体は、平成三年十一月に設立された立川市障害者後援会で、この後援会は超党派の市議をはじめ、立川市の財界、企業経営者、文化人など多彩な顔ぶれで構成されている。そして市内の障害者団体に資金を援助するなどの活動をしており、会員の中から「障害者が働ける場をもっとふやしてほしい」との声が高まり、㈱ハンディキャップ・サービスが誕生したもの。

それだけに、同社へ出資している地元企業や財界人、同社役員の報酬、配当は考えなく、利益はすべて障害者や障害者団体に還元している。

高津専務は「障害者の雇用の場というのは、従来、印刷業とか、クリーニング業といった作業の大半を機械がしていて、人は機械の周囲をうろうろしているだけだが、清掃作業は全部人がやらなければならない。どうすれば効率よく仕事ができるか考える仕事だから障害者のためによい仕事といえる」と語る。

総合福祉センターが障害者たちの仕事ぶりを、目の当たりにしている中里富士夫・社福祉協議会事務局長は、「仕事ぶりはていねいで、一生懸命やっている。お陰で福祉センターはどこもかしこもピカピカですよ」とほめていた。

市の大沢祥一・福祉部長は「高津さんたちのお陰で、障害者たちは毎日生き生きと仕事しているようですね。市の平成八年度の予算は三千五百二十四万円を出している」と述べた。

なお、立川市障害者後援会の歴代会長は、故砂川昌平氏（初代）、岩崎泉氏（二代目）、万田貴久氏（三代目＝現）。副会長が中野隆吉氏、村野安成氏、事務局長が高津年夫氏。